

『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む』

～音楽を形づくっている要素をもとに、表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成を通して～

小林 美佳

1 テーマ設定の理由

学習指導要領において、指導のねらいや手立てを明確にし、生徒が感性を高め、思考・判断し、表現する一連の過程を大切に学習指導を行うことが重視されている。

このことを受けて、音楽科では、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感受し、それをもとに、生徒一人一人が試行錯誤して表現したり、主体的に味わって鑑賞したりする学習の充実を図る。

そのために、個別学習や少人数によるグループ活動などを通して、生徒自らが思考・判断し、表現を工夫したり、聴いた音楽のよさや美しさなどを相手に伝えたりすることのできるような学習を展開する。このことにより、音楽的な感受を基盤として、思考・判断・表現する一連の過程を重視した学習を推進するための指導及び評価の在り方を研究することが本研究のねらいである。

2 「音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力」の育成

本研究では、「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核とし、それを生かした表現や鑑賞の学習を展開する。その際、個人または、小グループによる活動を重視する。表現の学習では、自分なりの表現の在り方をイメージし、試行錯誤しながら音楽を工夫して表現する。また、鑑賞の学習では、自分なりの音楽のとらえ方やイメージ等を大切にしながら音楽を聴いたり、仲間とともに音楽に対する意見交換を行う。そこで身に付けた力をもとに、各題材の中で、表現活動や鑑賞活動において、生徒が音楽に対する自分の思いやイメージを表現につなげるため、音楽用語などの音楽に関する言葉を用いて表し、話し合いができるような活動を行う。こうした学習過程により、「音楽を思考・判断・表現する力」が育つものととらえ、感受の力を高め、『表現領域と鑑賞領域の関連を図った授業づくり』を展開していく。

3 音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）ことの重要性

我々教師が、音楽を志す動機となった要因には様々あるであろう。義務教育時に受けた授業の印象がきっかけとなってもいる。また、幼少よりお稽古ごととして、ピアノなどの演奏活動、そして小中学生時に吹奏楽や合唱等の活動などにかかわった経験にもよるであろう。いずれにしろ、音楽的環境に身を寄せ、ある一定時期において継続的に取り組むことにより、音楽のすばらしさを感受した経験を誰もがもっている。我々が、音楽に感動し、様々な情動が喚起されるのは、こうしたバックボーンの中で“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力”が身に付いているからである。この“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力”が身に付いていることによって「音楽のすばらしさ」を感じるのである。

「音楽のすばらしさを感じる」とは、音楽をより深くとらえることができることだといえる。例えば、和声的な進行において半終止のあとには、終止感を感じ取れる。また旋律においてもその基調とする終止音への帰属を予感することができる。また、楽曲の全体構想を聴きながら内声や副旋律の存在、そして低音の動きや音色、テンポの変化など、楽曲の中にちりばめられた様々な音楽的要素を感じ取りながら音楽を感じ取り、また表現している。このように「音楽のすばらしさを感じる」ためには“音楽を形づくっている要素の働きと曲想との関連に気付く（感受する）力”が不可欠な要素となる。

4 全体研究との関わり

次の全体研究の具体的な視点①～④とかかわらせて授業実践を行い、検証を行うこととする。

① 生徒につけさせたい力とそれらを育むために生徒にもたせたい問い

全体研究では、教科を学ぶよさや生徒につけさせたい力を明らかにし、「自ら問う力」を育むことを目指している。「自ら問う力」とは、課題に対して解決するためにはどのようにしたらよいか、試行錯誤しながら考える力である。

これを受けて音楽科では、音楽のよさや美しさを理解するために、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考える。この力を身に付けさせるために、「音

楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」を学習の中核として、音や音楽に関心をもち、音楽の特徴や表現の工夫に気づき、音楽のよさや美しさを感じ取る。そして感じ取ったことをもとにして、思いや意図をもって、表現を工夫したり鑑賞したりするといった学習過程を重視する。この学習過程の中に、生徒に「問い」をもたせながら、主体的に音や音楽にかかわる場面を仕組むことによって、前述した生徒に身に付けさせたい力をさらに高めることができると考える。

② 生徒に問いをもたせる教材のあり方

「音楽を形づくっている要素を知覚・感受すること」が効果的にできるような教材開発を行う。具体的には、音楽を形づくっている要素の働きに着目させるための聴取教材をコンピュータを用いて制作したり、演奏家による演奏を録音あるいは録画し編集したりすることをいう。さらに「目には見えない音や音楽」の仕組みを細かく、深く、わかりやすくとらえさせるために、聴かせ方を工夫したり、聴き取った音や音楽の可視化を図るための手立てを講じたり、といった教材を最大限に生かす方法についても模索する。

③ 生徒に問いをもたせるための教師の役割

生徒が「問い」をもって学習する具体的な学習場面の一例として次のことが挙げられる。歌唱表現の学習において、「この旋律がはずむ感じがするのはなぜだろう？」と音楽に関心をもち、「付点のリズムを用いていることによってはずむ感じがするのだ」と音楽の特徴に気付く。そして「付点のリズムを生かして歌うためにはどのようにしたらよいか？」と表現の工夫を考える。このように「問い」をもちながら、感性を働かせながら音や音楽と直接かかわる学習を中学校3年間で積み重ねることによって、音楽のよさや美しさを感じ取ることができるようになるであろう。そのためには、教師が各題材において、指導のねらいを明らかにし、ねらいに即した指導内容や指導計画を整理し、すべての生徒が何を学習したらよいかの明確になるようにしなければならない。生徒が与えられた題材の中から、問わずにはいられない状況をつくることで、生徒が自ら考え、自分なりの感性で答えを見いだしていく過程を教師側がサポートしていくことが重要となる。

④ 生徒の問いをどう見取るか（表現活動・評価）

個別学習や少人数グループ学習を取り入れ、生徒一人一人が思考・判断・表現している状況の観察（生徒の発言）や学習シートの記述内容から把握する。具体例として、歌唱表現の学習において、聴き取った内容をもとにイメージをふくらませ、それを表現するためにどのような工夫をしているかについて楽譜への記入や言語を通して表している状況から見取ることが挙げられる。

5 評価規準の作成と評価方法の設定について

音楽科における学習評価では、表現領域の学習状況を①「学習への関心・意欲・態度」②「音楽表現の創意工夫」③「音楽表現の技能」の3観点で、鑑賞領域の学習状況を④「学習への関心・意欲・態度」⑤「鑑賞の能力」の2観点で評価する。平成22年11月の国立教育政策研究所教育課程研究センターから公表された「評価規準の作成のための参考資料」を参考にして、題材の評価規準を作成し、生徒の『音楽を思考・判断・表現する力』の実現状況を見取る。

また、評価方法については、生徒に音楽を形づくっている要素を知覚・感受させるために、一つの要素に注目させ比較聴取させるなどして、「見えにくい学力」といわれる感受している状況を観察（生徒の発言も含む）や学習シートの記述、発表内容から把握したい。

6 これまでの研究経過（成果と課題について）

平成17年度から平成19年度までの全体研究では、生徒一人一人が、本質的で重要な事柄をきちんと習得することにより、他の事柄においても様々な関連を意識し、自らが試行錯誤しながら「かかわり」を見いだすことをねらいとして研究を行った。その研究の成果と課題をふまえ、平成20年度から平成22年度までの全体研究では、生徒一人一人が見いだした「かかわり」を、生徒自身が振り返り、整理し、発信することができることをねらいとして研究を行った。

音楽科では、「かかわり」とは、音楽を聴く活動を通して、音楽を形づくっている要素を感じ取り、そこで感じ取ったことを表現活動及び鑑賞活動に生かすことだととらえてきた。一つの楽曲は様々な音楽的要素がかかわり合って構成されている。それがわかることによって音楽表現や鑑賞に対する意欲が高まると考える。この考えをふまえて、生徒が感受を基盤として「かかわり」を意識し、表現領域と鑑賞領域の関連した題材構成に取り組んできた。そして、音楽科として育む学力を把握するため、その前提となる題材構成の工夫・改善を図り、指導と評価の在り方などにつ

いて実践的に研究を進めてきた。

(1) 成果

- ① 「歌唱と鑑賞」、「器楽と鑑賞」、「創作」の題材構成とその評価の在り方について実践検証を行うことができた。
- ② ①のそれぞれの題材において、個別学習や少人数グループ学習を仕組むとともに、学習シートなどの評価方法を工夫することによって、生徒一人一人が、音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じているか、さらに、それらに基づきながら、どのように表現を工夫するかについての学習の実現状況を把握することができた。

(2) 課題

- ① 生徒自らが、主体的に音楽の構造などをとらえ、雰囲気や特質などを感じ取り、試行錯誤しながら表現を工夫したり、音楽のよさや美しさなどを味わって聴いたりすることができるような題材構成や学習指導の展開などについて一層の整理が必要である。
- ② 目標の実現状況を把握するために、ねらい、教材、学習活動の展開などに応じて、適切な評価規準を設定するとともに、観察、学習シート、演奏、批評など評価方法を一層工夫・改善していく必要がある。

7 今年度の具体的な研究内容

(1) 研究対象：第1・2学年

今年度は、歌唱表現の工夫を柱に研究を進めていく。音楽を形づくっている要素をもとに、自分なりの思いや意図をもって表現し、さらにグループ活動を通して他者の工夫や感性に触れ表現の幅を広げていくことができるよう、次のような内容を研究していく。

- 歌詞を手がかりにして、楽曲があらわす情景や心情を感じ取り、歌唱表現につなげていく手立ての工夫。(第1学年)
- 聴き取りの活動を通して、楽曲の仕組みや声部の役割について感じ取る(知覚・感受できる)教材の開発。(第2学年)
- 聴き取ったことを生かして、音楽を形作っている要素をもとにして自分の思いや意図をもち、歌唱表現活動につなげていく手立ての研究。(各学年共通)
- 楽譜に関するリテラシーを身につけ、表現活動に生かしていく手立てについての研究。(各学年共通)

(2) 成果の検証・方法等

検証にあたっては、授業における生徒たちの話し合いの様子や学習シート等の記述にみられる音楽的語彙などについて抽出し、個々の生徒がどのような変容があったかを、題材ごとに評価を詳細に行えるようにする。また、関心・意欲・態度に関する側面、そして音楽を形づくっている要素の知覚・感受に関する側面、そして技能を含む音楽表現の創意工夫や鑑賞の能力に関する側面の3つの関連性を見取っていく中で、音楽科として育む学力を明らかにした題材の構造化を研究する。

(3) 期待される成果

- 知覚・感受したことをもとにして自分の思いや意図をもって歌唱表現を工夫したり、楽曲を味わって聴いたりする力を身につけることができるようになる。
- 他者の感性や思いに触れ、お互いを認め合うことで表現活動がさらに充実し、表現に対する意欲が高まると考える。
- 楽譜に関するリテラシーを身につけることにより、音楽の構造について理解を深めることができるようになる。

〈引用文献〉

- ・ 中学校学習指導要領解説音楽編 文部科学省
- ・ 「これからの音楽教育 音楽教育における学力をどうとらえるか」大熊 信彦著
(中等教育資料平成22年4月号～平成23年6月号)

〈参考文献〉

- ・ 中学校音楽科の指導と評価 西園 芳信 監修 暁教育図書(平成21年)

第1学年 音楽科学習指導案

1. 指導内容 A表現(1)ア, B鑑賞(1)アおよび〔共通事項〕(1)ア(強弱・速度)
2. 題材名 歌詞の内容をもとにして, 歌唱表現を工夫しよう
3. 題材設定の理由

本題材では, 歌詞の内容からその情景を感じ取り, それにあった歌唱表現を工夫する。おもに強弱と速度について考えながら個人活動, グループ活動を展開していく。

1年生は, 音楽活動に意欲的で表現することにあまり抵抗感はない。しかし, 楽曲をどのように表現したいのか, また表現するためにはどのようにしたらよいかかわからない生徒がほとんどである。歌詞の内容から情景を思い浮かべ, その歌詞にはどんな表現があうのか, そのためにはどんな工夫ができるのか, などの問いをもつことは, 今後の表現活動において大きな意味をもつと考えられる。強弱についてもただ「強い」「弱い」という意味だけではなく, 「力強く」「やさしく」などといった様々な音楽の質感を感じ取り, 自分の思いや意図をもって表現できるようにさせたい。また, 歌詞の言葉を手がかりとして, 情景を思い浮かべるとともに, どのように表現したらよいかを考えさせることで, 旋律が同じであっても, 歌詞の内容によって速度や強弱などを工夫することで, 曲想が豊かに表現できることなどに気付かせていく。

これらの学習において, 個人で考えた表現をグループの仲間とともに試行錯誤しながら表現の在り方を考え, さらにそれをグループまとまりのある表現に工夫していく活動を通して, 自分の意志をもって音楽表現をすることの大切さを学び取れるよう配慮したい。

4. 教材について

(1) 教材

- 〈聴取教材〉 「待ちぼうけ」 北原白秋 作詞/山田耕筰 作曲
「どじょっこふなっこ」 豊口清志 作詞/岡本 敏明 作曲
〈歌唱教材〉 「赤とんぼ」 三木露風 作詞/山田耕筰 作曲
〈鑑賞教材〉 「赤とんぼ」

(2) 教材選択の理由

〈聴取教材〉

「待ちぼうけ」「どじょっこふなっこ」ともに, 同じ旋律で歌詞が変わっていく楽曲である。速度や強弱の工夫で全く違った雰囲気のある歌になることを感じ取り, 自分たちの表現の工夫へとつなげていくための材料として選択した。

〈歌唱教材〉

「赤とんぼ」は共通教材のひとつで, 1学年の教科書に掲載されている。三木露風が自らの幼少期の思い出を詩にこめ, 美しい日本の情景や郷愁の思いが描かれている。歌詞の内容に難解な部分はあるが, 自分なりの解釈をもつことができ, 旋律と言葉との関係などから表現の工夫を考えるのに適しており, 今回の題材を学習するのにふさわしい教材といえる。

〈鑑賞教材〉

鑑賞では, 様々な演奏者による「赤とんぼ」を聴かせ, 人それぞれの表現方法の違いについて感じ取らせていく。学習のまとめとして鑑賞させることで, 工夫して表現することのよさや面白さを感じさせることができる。

5. 題材の目標

- ・歌詞の内容から, 自分なりの思いや意図をもつことができる。
- ・自分の思いや意図を, 言葉や音楽記号で表現することができる。
- ・音楽記号を理解して, その記号にあった歌唱表現を工夫することができる。

6. 指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
「赤とんぼ」を歌唱する。	1時間 目	・三木露風, 山田耕筰について知る。 ・「赤とんぼ」を歌唱する。 ・2小節を1フレーズで	関①歌詞の内容やその背景に関心をもち, 意欲的に表現活動に取り組もうとしている。 【観察】	☆旋律の流れを意識して, 息つぎの場所などに留意しながら意欲的に歌唱している。 ■歌えていない生徒には, 近くで一緒に歌ったり, グループで	・学習形態 一斉 ・学習形態 グループ

		歌えるように練習する。 ・グループ(班)で伴奏なしで歌う練習をする。		向かい合って歌わせる。	
・聴取教材で感受したことをもとに、「赤とんぼ」の表現の工夫を考える。	2時間目	・「待ちぼうけ」を聴き、同じ旋律でも違う表現をしていることに気付く。 ・「赤とんぼ」の歌詞を読み、内容について考える。 ・2・3番と4番の違いについて考え、歌唱表現の工夫を考える。 ・各自で考えた工夫をグループで歌う。	創①歌詞の内容から情景を思い浮かべ、強弱や速度などを工夫し、どのような表現をするか思いや意図をもっている。 【観察、楽譜、ワークシート】	☆歌詞を手がかりに、速度や強弱を変化させていることを感じ取り、それを表現の工夫に生かしている。 ■違いがわからない生徒には、歌詞を読ませたり、聴取教材を思い出させたりする。	
前時に考えた表現をさらに深め、グループでまとめる。	3時間目(本時)	・「どじょっこふなっこ」を聴き、表現の工夫について考える。 ・あらためてグループで「赤とんぼ」の歌唱表現について工夫する。 ・前時のものと合わせてグループでひとつの表現にまとめる。	関②グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べ、表現の工夫に意欲的である。 【観察】 創①歌詞の内容から情景を思い浮かべ、強弱や速度などを工夫し、どのような表現をするか思いや意図をもっている。 【観察、楽譜、ワークシート】	☆前回グループで考えた工夫を見直し、それぞれの意見を話し合いながら練習している。 ■見直しができない生徒には、聴取教材をもう一度聴かせる。 ☆言葉や音楽記号を用いて、新たな表現方法を楽譜に記入している。 ■何も記入できない生徒には、グループのメンバーの意見を参考に考えさせる。	・学習形態 一斉 ・学習形態 グループ
工夫した歌唱表現を発表し、互いの演奏を聴き合う。	4時間目	・グループで工夫した表現を発表する。 ・お互いの演奏を聴きあい、感じたことを記述する。 ・「赤とんぼ」を全員で歌唱する。 ・「赤とんぼ」のさまざまな演奏を鑑賞し、情景や表現の工夫を味わい、自分の好きな表現についてワークシートに記述する。	技①歌詞の内容や音楽記号を理解し、工夫して歌唱表現をする技能を身に付けている。 【観察】 鑑①歌詞の内容からイメージをもち、日本音楽の美しさや多様な音楽表現を味わって聴いている。 【観察、ワークシート】	☆考えた表現を聴く人にわかるように発表している。 ☆他のグループの発表を聴いて、よいところや改善点を記述している。 ■思うように発表できなかった生徒には、どんな表現をしたのか記述させる。	・学習形態 グループ ・学習形態 一斉

7. 本時の授業について

- (1) 日時 平成24年10月6日(土)
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 第1音楽室
- (3) 本時の目標：歌詞の内容にあった歌唱表現を工夫する。
- (4) 展開

過程(時間)	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入(5分)	1. 前時の確認をし、本時の学習内容を知る。	・前回グループで考えた工夫を、さらに見直し改善することを伝える。	
展開(43分)	2. 「どじょっこふなっこ」を聴き、前回聴いた「待ちぼうけ」との表現の違いについて考える。	・「どじょっこふなっこ」の歌詞を見せ、どんな表現が予想できるか生徒に考えさせる。 ・予想通りまたは予想とは違う表現	・学習形態 一斉

	<p>3. グループで「赤とんぼ」の歌唱表現について工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回考えた表現をもう一度歌い、さらに工夫できることはないか、または変更点はないか考える。 ・実際に歌って確かめていく。その際聴き役を必ずつくり、自分たちの演奏を客観的に聴き、アドバイスができるようにする。 <p>4. 前時のものと合わせてグループでひとつの表現にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとめた表現を練習する。自分たちが意図したように聴こえるかどうかを必ず確認していく。 	<p>を聴いて、自分たちの前回の工夫についてあらためて見直しをさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前回の「待ちぼうけ」と今回の「どじょっこふなっこ」ではどんな工夫の違いが見られたのかを生徒に考えさせていく。 ・歌詞をもとに考えていくことを確認する。 ・話し合い活動に偏らないよう、一緒に歌うなどして歌唱活動の時間を長くとらせる。 ・表現はできるだけ人に伝わるように、大げさにさせる。特に速度の違いなどは表現が難しいため、技術指導も巡回して行う。 ・実際に歌って、歌いやすかったか、聴いている人に意図が伝わるかを考えながらまとめさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 グループ 関②グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べ、表現の工夫に意欲的である。【観察】 創①歌詞の内容から情景を思い浮かべ、強弱や速度などを工夫し、どのような表現をするか思いや意図をもってしている。【観察、楽譜、ワークシート】
まとめ(2分)	5. 次回の学習について知る。	次回は工夫したことをグループごとに発表し、意見交換することを告げる。	

8. 本年度の研究のまとめ

(1) 生徒の見とりについて

今回行った授業において、生徒が問いをもったと判断したポイントは聴取教材の選択である。今回は「歌詞の内容」をもとに「強弱と速度」の工夫について考えるため、歌詞によって歌唱表現を変えている聴取教材を2種類用意した。まず、2時間目に『待ちぼうけ』を聴かせることで「歌詞の内容」が「音楽表現の工夫」につながっていると感じ取らせる。うさぎを待ち続けて畑が荒れてしまう様子を表現するために速度を遅くするなどの工夫に気付くことで、『赤とんぼ』でも同じような表現ができることを理解する。そこで、赤とんぼがとまっている様子を速度で、桑の実をつんだ思い出を強弱で表現しようなど、各自で試行錯誤を行った。

『待ちぼうけ』を聴いた後の生徒の反応（発言）

- ・歌詞に合わせて強弱や速度が変わっていた。
- ・4番ではただひたすら待つ様子が、速度を遅くすることでよくわかった。
- ・畑が荒れてしまったことがわかるように工夫されていた。

3時間目には、まず『どじょっこふなっこ』の歌詞を配布し、前回の『待ちぼうけ』を参考に表現を予想させた。

『どじょっこふなっこ』を聴く前の生徒の予想（発言）

- ・4番は冬なので、寒い様子をゆっくりの速度で表すのではないか。
- ・2番は夏なので、テンポを速くして楽しい感じにしようと思う。
- ・冬のときには強弱を弱くして、寂しい感じを出すと思う。

ここで注目すべきなのは、生徒から3番の歌詞（秋）に関する予想がほぼ出されなかったことである。これは授業を行った1学年の4クラスすべてでみられた傾向で、秋という季節に対して生徒があまりイメージを持たず、わかりやすい夏や冬への発言に偏ったことがわかる。今回の聴取教材は、「3番（秋）で速度が遅くなり、4番（冬）で最も速くなったうえで強弱も強くなって終わる」という表現をしているものを選択した。つまり生徒の予想とはまるで違う表現となっている。この聴取活動後、生徒からは驚きの声がかげ、意見がでなかった3番と、予想とはほぼ真逆の表現をした4番について「なぜこのような表現をしたのだろう」と考える様子が見られた。

『どじょっこふなっこ』を聴いたあとの生徒の反応（発言）

- ・秋は木の葉がひらひら落ちる感じが、ゆっくりした速度につながったと思う。
- ・寒いからゆっくりだと思ったけれど、速く歌うことでとても寒い様子がわかった。
- ・自分が考えたことと違って驚いた。歌詞からたくさんの表現ができることがわかった。

このように意外性をもつ教材を選択し、それを本教材『赤とんぼ』につなげたことで、生徒の興味・関心をひき、

